

は し が き

神田外語大学大学院言語科学研究センター (CLS) の 2003 年度における研究活動の成果の一端として紀要の第 3 号を刊行できたことを幸いに存じます。

本号には、論文が 10 本収録されており、著者名のアルファベット順に並べられておりますが、理論言語学関連のいくつかの論文は、扱う現象や言語理論的観点から互いに関連しています。藤巻と *Inoue* は共に難易文を扱っていますが、藤巻は「読みやすさ」といった「さ」接辞名詞化の観点から、*Inoue* は統語構造、特に範疇 *vP* の役割に注目して考察しています。*vP* の機能と文構造については、*Hasegawa* が所有者上昇構文の分析を通して、*外崎* が複他動詞・他動詞の交替現象の観察から提案を行い、文の別の機能範疇である *T* の *EPP* 素性のあり方について *Miyagawa and Babyonyshev* が「てある」構文の分析から新しい考え方を提示しています。さらに、*T* と関係しますが、主語が数量詞である時のスコープ現象を *上田* が、「の」「こと」補文の選択に関する一般化を *鎌田* が扱っています。*山田* の論文は「焼きたてのパン」といった「たて」接辞構文の分析で、藤巻の論文とともに統語と語形成に関わる研究です。また、*斎藤* は本紀要 (SAL) 第 1 号につづき言語表現に映し出される文化の問題を扱う理論としての「言語文化学」を取り上げています。言語教育関連では、*小林* が読解判定用の質問文とテキストの特性との関連を学生へのテスト結果を踏まえて討議し、言語教育と評価にかかわるモデル構築の可能性を追求しています。

CLS では、下記の通常の研究活動に加え、日本学術振興会科学研究費の助成を受けているプロジェクトの活動を様々な観点から支援しています。2003 年度には、研究プロジェクト『テキスト理解と学習 - テキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について -』（研究代表

者：堀場裕紀江；研究分担者：長谷川信子、井上和子、小林美代子) が 2002 年度に引き続いて行われ、加えて新たに、木川行央教授を研究代表者とする 3 年間のプロジェクト『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』が発足しました。『テキスト理解と学習』プロジェクトの 2003 年度の成果の一部は『科学研究費 2003 年度報告書』として別にまとめられています。その報告書の目次は本号巻末に掲載されていますが、言語理論と学習理論を横断的に考察した理論と実証、応用研究の成果が報告されています。科学研究費関連の報告書はこの報告書だけでなく、本センター発足の母体となった平成 8 年度から 12 年度にわたる 5 年間の COE プロジェクトの報告書も、部数の許す限り郵送料などの実費をご負担いただくこととなりますが、お分けいたしております。ご興味のある方は CLS へご連絡下さい。CLS についてだけでなく COE プロジェクトの研究活動と成果についても CLS のホームページでご覧いただくことができます。

また、通常の活動としては、井上和子 CLS 顧問による定期研究会だけでなく、国内外からの研究者を招聘したコロキウムが数回開催されました(巻末のコロキウム・レクチャー報告参照)。また、マサチューセッツ工科大学の宮川繁教授が前期後半および夏期休暇にかけて 3 ヶ月ほど CLS を拠点に活動され、コロキウムだけでなくレクチャー形式の研究会で講演されました。

本号は、研究員の山田昌史さんの献身的かつ緻密な働きなしには、到底全てを期限内にとりまとめることはできませんでした。また、事務担当の椎名千香子さん、細井洋実さんには、CLS の研究活動全般に大いに尽力いただきました。心より感謝しております。

2004 年 3 月

言語科学研究センター・センター長

長谷川 信子